

## 14. 史跡 谷戸城跡

所在地 大泉村谷戸字城山

調査原因 史跡整備に伴う遺構確認調査

調査期間 1998年7月27日～12月21日

調査面積 780.2m<sup>2</sup>

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 伊藤公明・渡邊泰彦

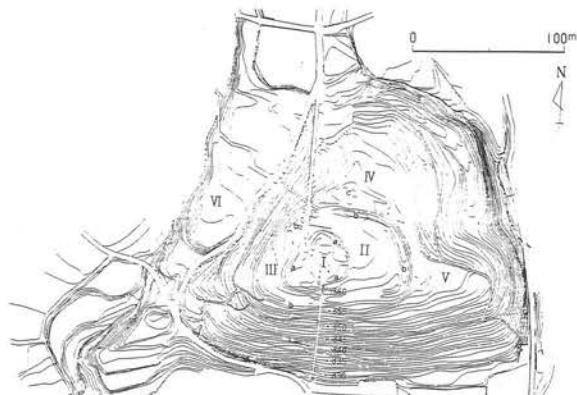


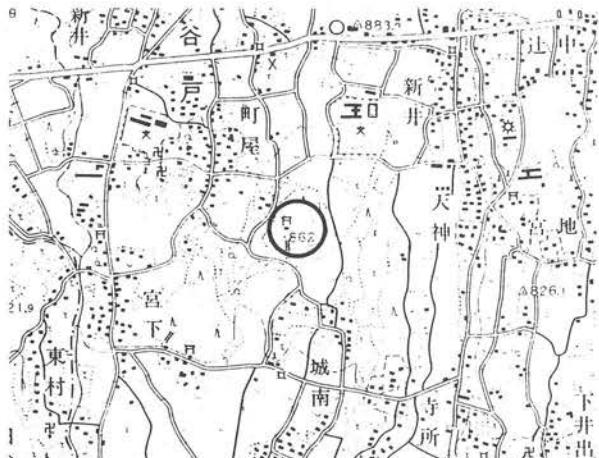
図1 郭配置図 (S = 1/5,000『御所遺跡発掘調査報告』より転載)

が確認された小和田館跡、堀内下総守が城主と伝えられる県指定史跡深草館跡、地下式土壙が多く検出された金生遺跡など中世の遺構、遺物が多く確認されている地域である。

平成5年に「茶臼山と呼ばれる山頂に土壙・堀などの遺構が良好に残って」おり、「武田氏の発展過程を具体的に跡づけることができる重要な城跡である」との理由から史跡の指定を受け、現在に至っている。本年度は、史跡整備に伴って5ヶ年計画で進められる発掘調査の1年目に当たるが、これまでに6度の試掘調査（昭和56、平成1・4・7・8・9年度）が行われており、それぞれ成果をあげている。

調査方法は、公共系座標を基準とする100m四方の大グリッドを10m四方のグリッドに、さらにそのグリッドを5m四方に分割した後、その中に4m四方の調査トレンチを設定し、トレンチ間には幅1mのベルトを残した。このベルトは二の郭と五の郭の層序を通して見るためのもので、両郭のほぼ中央を通る東西のラインと二の郭の西端を南北に通るラインについては土層断面図を作製することとし、必要に応じてさらに幾つかのラインを設定した。

二の郭には36のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、柱穴痕35、土坑8（1～8号土坑）、集石2（2～3号集石）、焼土跡2、土壙の内側を巡る空堀、ローム質土による地業面を確認した。土坑と集石については、2号土坑と3号土坑以外は全て縄文時代の所産と考えられる。この郭は広範囲に渡って搅乱を受けており、表土直下で確認できるはずの柱穴痕は30～40cm掘り下げなければ検出できなかった。これらの柱穴痕は最初に大きく掘ったあと、その穴の壁に沿って黒色土か黄褐色土を入れて整形し、残りの部分に粘性の強い土を非常に硬く締めた状態で入れている。削った表面の模様から、練って混ぜ合わせた土を根固めに使っていたと考えられる。柱穴痕は郭の中央付近に集中し、芯々の距離は南北140～150cm、東西170～180cmを



史跡谷戸城跡は、最頂部の標高860m余、周囲との比高差約30mの独立丘を利用して築かれた城跡で、甲斐源氏の祖、逸見冠者黒源太清光の居城と伝えられている。その構造は主郭を中心に5つの郭を北、東、西の3方向に配したもので、急傾斜となっている南側には帯郭を数段設けている。また、城の西と東を流れる西衣川と東衣川は天然の堀としての機能を果たしている。谷戸城の周辺には対屋敷、町屋、御所といった地名が残るほか、12～13世紀の遺物が出土した城下遺跡、15～16世紀の遺物と地下式土壙

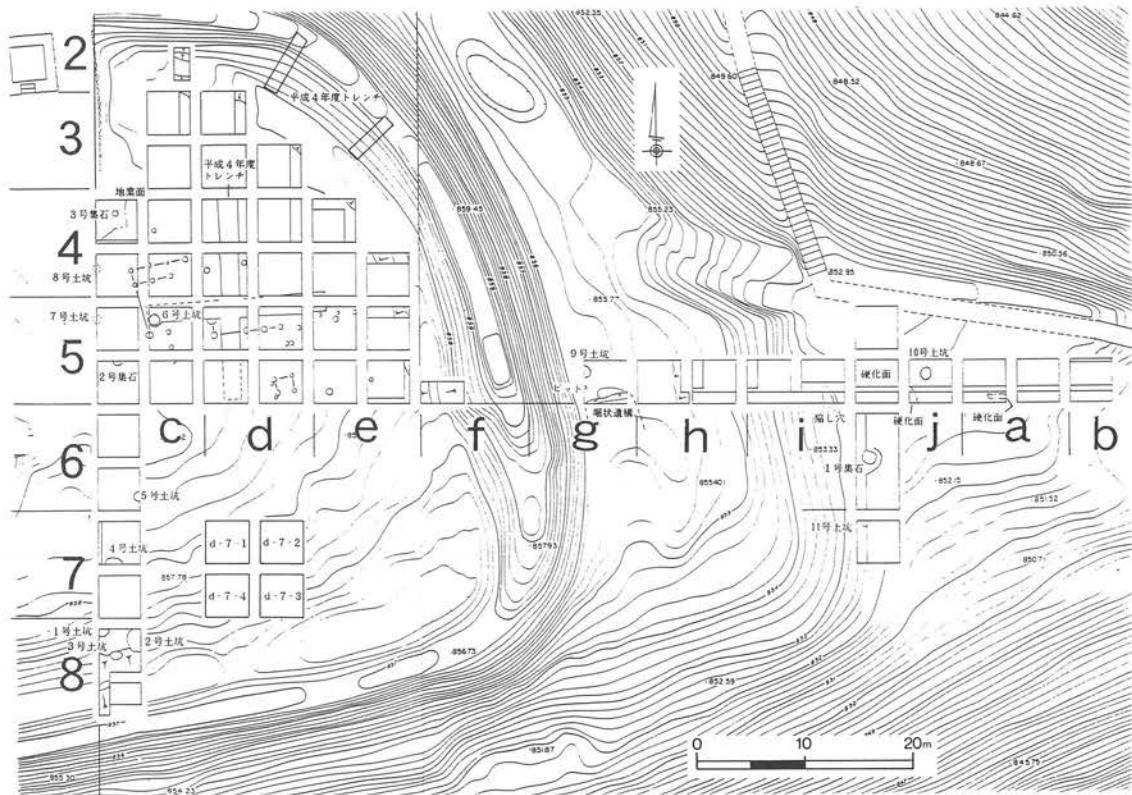


図2 史跡谷戸城跡 平成10年度調査区全体図 (S = 1 / 700)

測るものが多い。また、その配列から3～4棟の建物跡の存在が予想され、どれもが東西軸は東側が若干北へ振れている。これは、郭を囲う土塁のラインと平行になるようにしたためと考えられる。建て替えの可能性については、重複あるいは近接しているものがd-5-2、d-5-3で確認されているが、現時点では何とも言い難く、今後の南半の調査結果を待って検討したい。

空堀はc-8-4、f-5-4、e-4-3、e-5-2、c-2-3のトレンチで検出し、二の郭を囲う土塁の内側に沿って掘り込まれていることが確認された。断面形からは薬研堀と考えられるが、c-8-4（南）→c-2-3（北）と巡って行くうちに上幅と底幅は広がる傾向にある。c-2-3に至っては逆台形のような断面形となり、土塁側の斜面は中位に段を設けて、底部に至る傾斜を急にしている。しかし、勾配についてはこのc-2-3土塁側を別として約40°と一定である。また、以前から指摘されているように、南に比べ東～北側の土塁が高くなっていることも改めて確認された。二の郭は攪乱を受け、土塁頂部は表土を除去していないため正確な値ではないが、二の郭の面から堀底までの深さはc-8-4で約200cm、f-5-4（東）・c-2-3で150～160cmとなっている。そして土塁頂部から堀底までの比高差は前者が約270cm、後者が380～390cmを測る。土塁の高くなっている範囲が、四の郭とそこから南へ延びる郭状の平坦面に接した範囲と重なり、南の急斜面に接するc-8-4では土塁の盛り土が低いことからも、その目的がこれらの郭に対する防御の強化にあったことが分かる。後世、空堀は半分ほど埋まった段階で地業の施されていることも分かった。その層はローム質土を主体とし、非常に硬く締まったもので、すべてのトレンチから確認されていることから、この空堀を全周していると考えられる。通路として利用されたものだろうか。

五の郭には14のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、土坑3（9～11号土坑）、集石1（1号集石）、焼土跡2、ピット1、陥し穴1、造成によるものと考えられる硬化面、空堀らしき跡を確認した。土坑と集石は9号土坑を除いて二の郭と同様に縄文時代のものと考えられる。なお、ここで言う「五の郭」とは前述の四の郭から南へ延びる郭状の平坦面も含む。

この五の郭では、昭和56年度に桜の植樹に先立って試掘調査が行われている。幅3m、長さ30～40mのトレンチを東西方向に4本設定して行われ、ピット1、柱穴痕を有する土坑1、内耳土器出土の土坑1、砥石出土の土坑1のほか、青磁片（龍泉窯系か）1点、礎石状の石2個と堀状遺構が確認された。今回の調査範囲とは部分的に重複し、堀状遺構をg-5-3で、礎石状の石2個をj-6-1において確認した。

g-5-3では西壁際の土壘基底部に近い部分から土坑（9号土坑）とピットが確認された。特にピットは径30cm、ローム面からの深さ40cmを測り、前回の調査で発見された径15～20cm、ローム面からの深さ40～50cmの同じく土壘基底部に近い部分のピットとの関連が注目される。

また、j-5-4とj-5-3の南西隅の部分において灰黄褐色土の硬化面（表土下20～25cm）を検出し、若干離れた位置になるがa-5-4の東壁に接した部分でもローム質の土を突き固めたような硬化面（厚さ4cm）を確認した。このトレンチの南側には前述の内耳土器を出土した土坑があるほか、周囲からもかわらけの破片が比較的まとまって出土している。これらのことから、郭として機能していたことは十分考えられる。

なお前回の調査で確認されていた礎石状の石については、出土レベルが1号集石の確認面に近く、石を置くために掘り込んだ形跡も認められないと判断した。

出土遺物は縄文時代のものが9割以上を占め、中世の遺物で図示できるものは図3～4に示したものでほぼ全てである。1～3はかわらけで、1はc-3-2、2はd-3-3、3はj-5-3より出土。4はc-7-1出土の甕底部か、外面に指頭圧痕が明瞭に残る。5はc-8-1出土の縁釉小皿で、口縁部は灰釉。6はd-4-4出土の灰釉陶器皿、7はS56年度調査で出土の青磁盤か。小破片のため復元が困難で、口径は正確さを欠く。体部内外面に放射状に稜線があり、その間の器面は若干窪む。また、口縁部の端部は波状を呈する。8～10は内耳土器で、8はS56年度調査の土坑、9はc-8-4の空堀覆土中、10はd-3-1の搅乱土内より出土。11はS56年度調査の土坑より出土の砥石。12はc-7-1出土の銅製の仏龕具。

今回の調査では、遺構に伴う遺物は確認されなかった。また、出土点数も少なく、遺存状態も悪いため、遺物から城の年代を特定するのは困難と言える。そこで、遺構より採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代測定を行う予定であり、その結果については、また別の機会に報告したい。（文責 渡邊）

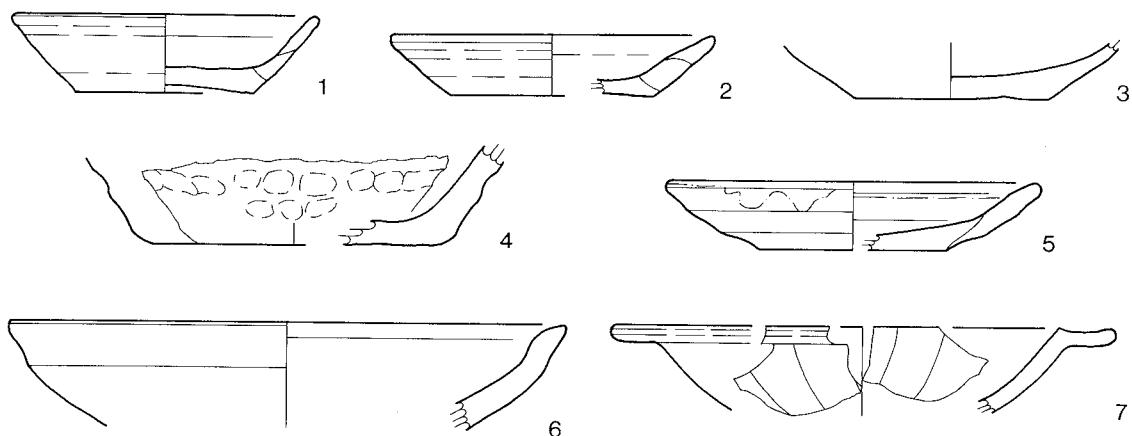


図3 出土遺物（1～3・5・6-1／2、4-1／4、7-1／3）

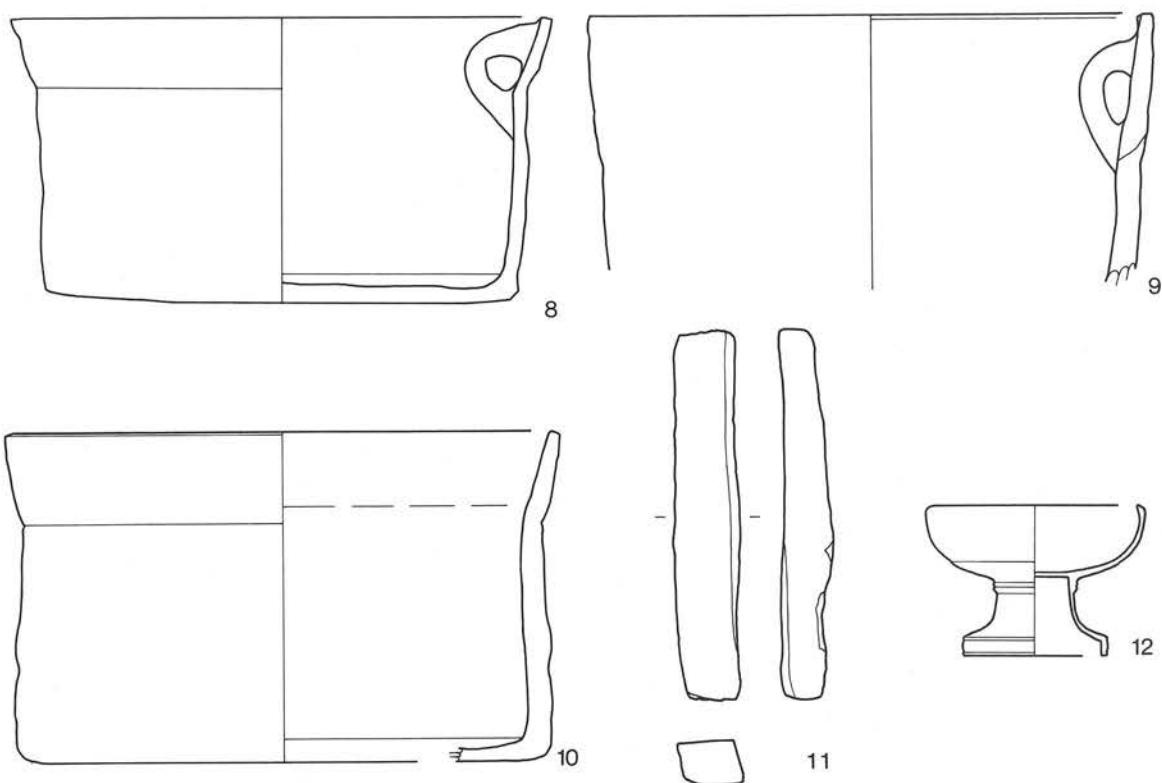


図4 出土遺物 (8~11-1/4, 12-1/2)



写真1 調査区全景



写真2 柱穴痕断面



写真3 c-8-4 空掘

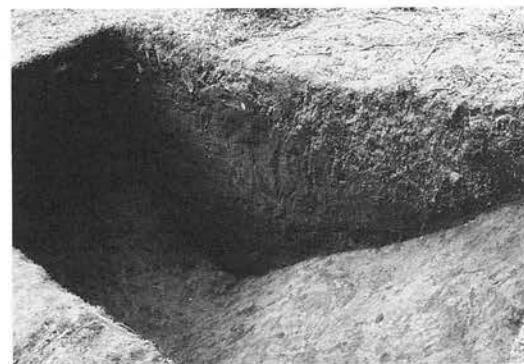


写真4 f-5-4 空掘

## 15. 上小用遺跡（第4次調査） かみこよう

所在地 北巨摩郡白州町鳥原地内

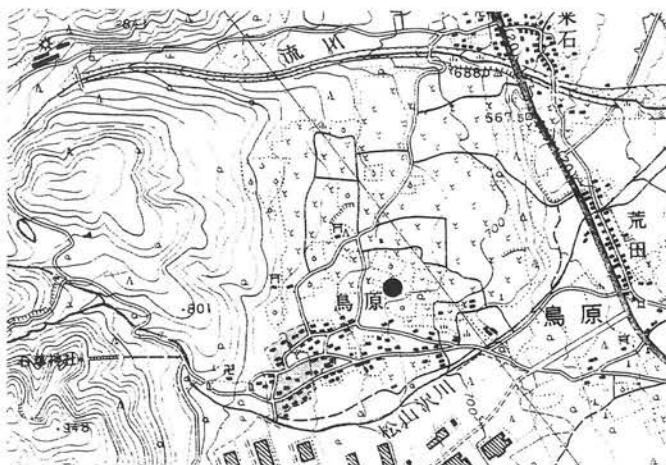
調査原因 畑地帯総合整備事業

調査期間 1998年9月21日～3月3日

調査面積 1,011m<sup>2</sup>

調査主体 白州町教育委員会

担当者 杉本 充



本遺跡は、明石山脈の北部、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地東麓に位置し、1km程東を北西から南東に流れる釜無川が形成した河岸段丘高位面に立地している。この段丘面（以下鳥原平）の北側は流川に、南東側は松山沢川に削られ、急な段丘崖となっている。現況は、畑及び遊休桑園である。

鳥原平では一面に中世の遺物が散布しているが、段丘の南側には縄文時代中期の遺物が濃密に分布しているため古くから遺跡の存在が知られている。昭和63年度・平成元年度と平成9年度に遺跡範囲と遺構確認のため試掘調査が行われている。

本年度の調査においては、縄文時代中期の竪穴住居址22軒、平安時代の竪穴住居址3軒、土坑群、地下式坑等が検出された。遺物はコンテナ200箱程出土しているが、翡翠製垂飾・黒曜石製異形石器・ミニチュア有孔土器等が特筆される。

### 引用・参考文献

折井 敦 1989 『教来石民部館跡』白州町教育委員会

折井 敦 1990 『教来石民部館跡』（第2次）白州町教育委員会

